

組換え食品のリスク感を高めている要因の分析

－ 健康食品と比較して －

農研機構食品総合研究所 柳本 正勝

はじめに

昨年の本大会において、食の安全・安心における安全に係わる心の問題は、安全感という用語を導入して分析すべきことを提案した。続いて、安全感を指数化することにより、農薬≦BSE≦食品添加物<組換え食品<健康食品の順に安全感が低いことを明らかにした。健康食品より低いこの結果に、組換え食品の関係者の多くは納得できないと思われるが、これが民意とすれば、その要因を解析的に究明し、的確に対応する必要がある。ところが、安全感の問題はとかく単純かつ短絡的に結論を導いてしまう。

本報告では、この課題にアプローチするための集計表を提案し、公表されている調査結果を用いて、組換え食品のリスク感が高い要因の分析を試みた。なお、安全性分野ではリスクの概念で論ずるのが一般的であることから、専門家を対象とする場合、今後は用語としてリスク感を用いる。

1. リスクの比較

組換え食品では、規格基準の中で厳格な安全性評価基準が定められている。審査は食品安全委員会で行われ、農林水産省と厚生労働省がリスク管理機関として目を光らせている。実用化が始まって16年。栽培面積は1億2千万ヘクタールを超えているが、事件の報告は全くない。一方、健康食品については、現状は一部の民間団体による自主審査にすぎない。審査を経ることがなくても販売が可能である。厚労省検討会による安全性評価基準の報告書が2008年にまとめられたが、内容は緩やかである。審査は国ではなく第三者機関とされたが、未だ審査が始まっていない。リスク管理で国が関与するのは、事件が起きた後である。そして、

実際に事件が頻発している。このようにリスクの視点からは、組換え食品の優位性は疑うべくもない。にもかかわらず、リスク感で比較すると組換え食品の方が高い。

2. 本課題へのアプローチ

この要因を探るために、たとえば食品安全委員会は、毎年食品安全モニター課題調査（以下アンケート調査）を実施し、項目選択型で「不安を感じる理由」を質問している。しかし、この結果から組換え食品のリスク感が高い要因についての知見を得るのは早計すぎる。要因が曖昧であるにも拘わらず選択肢を作成するところに問題が指摘できる。

要因が曖昧な場合、自由回答型質問を活用すべきである。その必要性が指摘されているにもかかわらず、これまで採用されてこなかったのは、集計が困難なためである。そこで、リスク感に係わる記述式回答結果に利用できる集計表（表1）を作成した。集計表には、想定し得るカテゴリーを網羅してある。ただし、カテゴリーを完全に相互排他的とすることは不可能であった。そのため

表1 分類に使用する集計表（大カテゴリーのみ）

リスクに係わる	直接係わらない
対象物自体	信頼
対象の随伴物	情報提供
農業等生産過程	利害得失
食品加工過程	リスク認知の因子
食品流通過程	自発性
調理過程	食品観
消費過程	生活規範
食事状況	心理的要素一般
新規開発	消費者の自覚
食品安全行政	その他

に、優先順位を定めて、分類する必要がある。集計後は、分類された数が多いカテゴリに注目するとともに、そこに記述されている内容を吟味することにより要因を分析する。この手法によっても、集計結果から必然的にリスク感に係わる要因を導くことはできない。しかし、場当たりに集計するよりは、明らかにその後の分析が容易である。

3. アンケート調査での記述内容

活用事例として、まずアンケート調査の「不安を感じている理由」の質問での4ヶ年分の記述内容を用いた。

組換え食品に関して記述されている内容を整理すると、75件であった。このうちリスクに係わる理由が42件、リスクに直接係わらない理由は33件あった。リスクに係わる理由は、大カテゴリとしては組換え食品自体(22件)、新規開発(10件) 食品安全行政(10件) とに全て分類された。食品安全行政を中カテゴリに細分化すると、リスク評価(8件)が多かった。組換え食品自体の記述内容をキーワードで整理すると、“次世代”(9件)と“長期間”(8件)が多かった。新規開発では、“未知”(5件)と“歴史が浅い”(5件)がキーワードとなった。リスクに直接係わらない理由としては、利害得失(16件)と食品観(6件)が多かった。利害得失の中カテゴリでは、一般に良く指摘されるベネフィットはなく、逆のディスアドバンティッジに全て分類された。その記述内容は“環境”や“生態系”に言及した理由が目立った。食品観では、中カテゴリとしては全て自然に分類された。

一方、健康食品に関して記述されている内容は50件で、このうちリスクに係わる理由が31件、リスクに直接係わらない理由は19件であった。リスクに係わる理由としては食事状況と食品安全行政が多く、それぞれに10件と6件であった。前者の多くは、中カテゴリとして摂取量に分類でき、過剰摂取への危惧を挙げている。後者はリスク評価とリスク管理が半々であった。リスクに直接係わらない理由としては、情報提供が15件と集中し、中でも事業者による宣伝に疑問を投げ

かけている。

以上の結果をまとめると、組換え食品についてはリスクに係わる理由が案外多く、その内容は科学的検証が困難なものに集中している。リスクに直接係わらない理由では、“環境”や“自然でない”など一見リスクと結びつき難い理由が挙げられている。全体として、抽象的ながら行政の係わりを期待しているように見える。これに対し、健康食品では消費者が食べ過ぎる懸念とか事業者による誇大宣伝など、事業者・消費者の責任に係わる内容が多くなっている。

4. 書籍に記述された意見・主張

本報告で提案した集計表は、食の安全・安心に係わるカテゴリ一覧でもあるので、整理の対象は必ずしもアンケート形式の回答である必要はない。そこで、組換え食品について書かれた書籍から安全・安心に関し記述された意見・主張を収集し、その集計を行った。なお、健康食品については該当する書籍がほとんどない

組換え食品について31件の意見・主張を収集できた。このうちリスクに係わる意見・主張は15件で、直接係わらない意見・主張は16件であった。前者はこの場も組換え食品自体(9件)と食品安全行政(4件)が多く、新規開発に該当するものはなかった。リスク直接係わらない意見・主張は11件が利害得失に分類されたが、この場合もディスアドバンティッジ(8件)が多かった。

全く異なる資料であるにも拘わらず、アンケート調査の結果と傾向が似ている。

おわりに

以上のように、集計表を準備して記述内容を整理することにより、リスク感を高めている要因についての知見を得ることができた。ただし、自由回答型質問による調査結果には限界も指摘されており、本来は項目選定型質問による調査でその妥当性を検証する必要がある。

リスク感を高めている要因は、その内容が例え科学的には見当外れにみえても、行政などによる広報資料には、それに対する分かり易い説明を含めることが大切である。